

戦士の身体
の半分の主
導権を
やらう

*スライムのこうげ
せんしのからだ
せんしはめの
まっしろにな

戦士の身体
の半分の主
導権をやら
せよう

*スライムのこうげき
せんしのからだに
せんしはめのま
まっしろにな

その日剣士は経験値とお金を集めるためパーティを抜け出し雑魚狩りをしていた。しかし、途中油断からスライムに先制攻撃をうけてしまう。
「くっ……こんなはずじゃ……」
「……ってどこ触つて！うぐっ！んんんっ！」
スライムが剣士の身体にまとわりつき、手、足、お尻、そして口へとまとわりつき、体の中にはいつてくるのである。

「うぐっ！んんん！んんん！
（な、なによこいつ……普通のスライムじゃないの？）
が、んぼって抵抗する剣士だったが、
噛みちぎろうとしても噛みちぎれない。
どんだん口の中に入れてくる。
しかし不思議と苦しくはなかった。
そのうち身体にまとわりついていく。
スライムが減っていく。
全てが剣士の中に入っていくようにだ。」



「**!!!**」
スライムが先ほどとはまた
違う動きをし始めた。
尻の方：剣士の秘部から侵入を
計ろうとしているようだ。

「**~~~~~**」
「や、やだ！やめて！そんなところ！」
口にスライムが入っているため
声にならない声を必死にあげる。
しかし、近くには誰もいない。
こんなどころで、尻穴とま〇こに
ズンズン入って来ている。
ぬるくとても気持ち悪い。
膣壁をたどるように入ってくるのが
さらに気持ち悪い！いや、少し……
そう考えているうちに剣士は気を
失っていった。



気が付くと剣主は二人
野つばらで寝ていた。
「くそっ、なんだったの、あいつ
あ、あんたはエツチなこと、まあ
誰にも見られてないし
相手は人間じゃないからまだマシね」

しかし、彼女は気付いて
いなかった。もし負けたのなら
町に戻つてゐるはず。
どうしてこんなところで復活
しているのか、そのことに
気が付いていなかった。

ふと、気が付くと
なにか身体がぼんやりしている
自分の身体ではないような
少し不思議な気持ち。
「？呪いとか魔法でもかけられたのかしら？
早く町に戻らないと！」
そうして、彼女は少し膨れたお腹に気が付かず
ふらふらとした足取りで町に向かった。



町に着いた剣士は宿を探した。体力が減っていたからだ。宿はすぐに見つけた。以前来た町なので当たり前だったが。「さあ、早く休もう。お金も足りる。あれ？」彼女は宿を通り過ぎてどこかに行つてしまった。「ちよ、ちよつと！なんで？足が勝手に動いて……まさか、やっぱり何か呪いをかけていたの！」どうやら彼女の意思ではないようだ。

「くっ、ど、どうしたらいいの!?
なんでこんな……身体が勝手に動いてる?どうしたらいいのよ」
彼女はどどん町でも誰も訪れなさそうな場所に向かって行く。
「だ、誰か!誰か!なんとかして!」
彼女の叫びが聞こえたのか
数名の男がやってきた。
「どうかしたのかい?女剣士さん」
「お願い!身体が!かって……」



口が思うように動かない。
そのとき彼女は初めて『浸食』という
二文字が頭をよぎった。
身体をどんどん誰か得体の知れないモノに
動かされていつている。
いや、得体の知れない物ではない。
十中八九あのスライムだ。それを考え付いた途端
身体中が火照っていることに気が付いた。
熱い。欲しい。入れたい。

「おい嬢ちゃん まさかこんな所に
誘ってこんなこと自分からするなんて
もじかして遊び人なのかい？」
気が付くと目の前に男根があつた。
「ひっ！」一瞬首を傾けて逃げようとする。
しかし、身体が言うことを聞かない。
「おいそんな汚いもの…み…せない」
「おいおい 自分で俺の息子を出しといて
そいつはねーだろ？それともなんだ
そういうプレイが御所望なのか？」
彼女のがんばつてひねり出した言葉も
聞き入れてもらえなかつた。
それどころか自分の手がその男根を
じつかり握っていることに気が付いた。

ずぶつ!!

「~~~~~♡」
彼女はあらがうこともできず
女性器に見知らぬ男の陰茎が
侵入してきた。

「アハっ♡気持ちいいのぉ……♡」

また回から言葉が勝手に出る。
しかしこれは身体だけではなく
彼女自身もそう思っていた。もちろん
こんな甘ったるいセリフではなかつたが、
いままで自分でオナニはしてきただけがあつた。
指なども入れたことがある。その時の
膣壁に擦れた時の気持ちよさと今の
気持ちよさはとても比べ物にならない。
一回動く度にじびれる。
とても自分の身体とは思えない。
これはスライムのせいだ、そう思い込んで
自分の腰が動いているのもそのスライムの
せいにしていた。とても気持ちいい。



「ああ、もつと、もつと突いてえええ！」
身体がどんどん自分のでは
なくなつていくのを感じる。

私はこんなにエッチじゃない
これはスライムのせい
全てあいつが悪いんだ

彼女はそう思うことで今の流れを
受け入れようとした。

「すごくいやらしい音が響き渡る。
「いやー君最高だよ
締まり具合も最高だし
中もすくくぬるぬるしていて……
いくらでも中に出せそうだよ！」
男が何かいつて来ているが
剣主はすでに自分ではない何かになろうとしていて理解が追いつかなかつた。
「だしへえ♡中に熱いのお♡」

それから数日後
彼女の姿はその町の名物に
なっていた。
「ふふふ、やつと完璧に身体が
動くようになったぜ」
「あいかわらず彼女本人がしゃべっている
とは思えない回調であった。
「俺の編み出した新しい技でスライムに
変身して身体を奪う」
これなら俺はレベルアップなんかしなくても
強くなれるって思ったが」

「まさか女剣士の身体をちようだいできる
とはね？返して？何を言ってるんだ
もうこの身体は俺のモノなの」
「こんなに中出しされてもう戻れないんだよ」
彼女の意味のわからないことを
つぶやいている。本当に壊れてしまったようだ。

「おっと新しい客か。
ほらそのあなただ」
「私のまのこくちよぐちよに
してくれない？」

完

★奥付け★
誌名:戦士の身体の半分の主導権をやろう
サークル名:あめしょー
発行者:三日月ネコ
発行日:2012/07/16
pixivID:573106